

---

---

# グローバルCOE特別セミナー

---

---

演者：貝淵弘三 博士 (Dr. Kouzo Kaibuchi)  
名古屋大学大学院医学系研究科  
附属神経疾患腫瘍分子医学研究センター  
神経情報薬理学

演題：統合失調症の発症脆弱性因子 DISC1 の病態生理機能.

日時：平成 20 年 6 月 16 日 (月)  
15 時 00 分～16 時 30 分

場所：東京大学医学部教育研究棟 13 階第 6 セミナー室

**概要**：統合失調症は人口の約 1% が思春期・青年期に発症し、多くの難治例が存在する精神障害である。幻覚・妄想などの陽性症状と対人的接触性の低下や意欲発動性の減退といった陰性症状に加え、記憶の低下といった認知機能の障害など多彩な精神症状を呈する。既存の治療では十分な効果が得られない難治例も多い。統合失調症患者の神経画像解析や死後脳解析から、中枢神経系の発達障害（海馬や前頭前野皮質などの神経細胞のシナプス形成不全など）が発症に関与していると考えられている。また、双生児研究を中心とした遺伝学的研究により、発症には遺伝因子の関与が比較的強いと推測されている。これまでに、Disrupted-in-schizophrenia 1 (DISC1)、Neuregulin-1、Dysbindin や COMT など有力な発症脆弱性遺伝子が複数同定されている。しかし、発症の分子機構は現在なお不明である。私共は統合失調症の分子病態を明らかにする目的で、これらの発症脆弱性因子の病態生理機能の解析を行ってきた。最近、DISC1 が“積み荷”分子を軸索内の微小管モーター蛋白質である Kinesin-1 と連結させる“積み荷受容体”として機能することで、“積み荷”の軸索先端への局在化、軸索の伸長を制御していることを明らかにした。本セミナーでは、DISC1 を中心にこれらの発症脆弱性因子の病態生理機能について概説する。